



## を 読 む

河合文化教育研究所 主任研究員 丹羽健夫

**外** 国人) 留学生からの質問は、まるで鋭い光のように、海中深く眠っている『見えない(日本語の)文法』をくっきりと浮かび上がらせる』という著者の言葉通り、長年何気なく使っていた日本語が、かくも摩訶不思議で奥の深いものであることに、目から鱗が落ちる思いを感じさせる本である。

**あ** の人はひと癖もふた癖もあるそうだから・・・」という会話を耳にした留学生が著者にたずねる。「いち癖、に癖、しち癖、では変ですか」「そうね、人間は『なくてなな癖』というから変でしょうね」

**そ** う、日本語の数には「いち、に、さん、・・・」と「ひとつ、ふたつ、みっつ・・・」の2通りの基数詞(というのだそう)があり、しかも箸が一膳、肉がふた切れ、牛が5頭、刀がひと振り、烏賊が10杯など、数の後にもものによって異なる助数詞(というのだそう)がほかにも、匹、本、束、発、隻などと数え切れないくらい存在する。こんな言葉ってほかにあるだろうか。

**存** 在を表す表現は英語なら There is (are) であるが、日本語には「ある」「いる」の2つがある。そしてその使い分けには規則がある。「あそこに郵便局があります」などと言っはいけない。「いる」は主語が生き物のとき、「ある」は無生物のとき、ただし植物は無生物扱いとなる。へえ、こんなこと意識したこともなかった。なんだか掘り下げると哲学が出てくるかもしれない。

**き** のう虹を見ました。とてもきれいかったです」これは形容動詞「きれいだった」と形容詞「美しかった」の活用の混同。うーむ、そういえば形容詞、形容動詞にも活用があったんだ。

**外** 国人留学生への日本語教育の圧巻は動詞の活用だ。我々は中等教育で未然、連用、終止、連体、仮定、命令を習ったが、それだけでは日本語教育ではものの役に立たない。そこでここでは途方もない動詞の活用が登場する。

「てフォーム」「たフォーム」「たりフォーム」などなど聞いたこともない

活用形群だ。

**て** フォーム。動詞「書く」のてフォームの活用は次のようになる。書いておく、書いてある、書いてみる、書いてしまう、書いてあげる、書いてくれる、書いてもらう。

**て** フォームの構造は動詞を『て』の形にして、その後に補助動詞と呼ばれるものをつけた形からなる。補助動詞というのは、本来の意味を失ってしまっ、別の役割を果たしている動詞のことだ。・・・動詞『書く』の後に、補助動詞『いる、ある、おく、みる、しまう、あげる、くれる、もらう』を付け加えることで、『書く』の表情がさまざまに変化する」

**日** 頃何気なく使っている日本語という自分の家来が、ある日突然反乱を起こし、我々は不意打ちをくらい慌てふためき「悪かった、悪かった。君のことを深く気にも留めずに平和な日々を送っていた、ぼくが悪かった。反省します」とあらためて日本語や日本文化の内奥を見つめ直す、そんな心の所作を促す本である。



◀『外国語としての日本語 その教え方・学び方』  
佐々木瑞枝著  
講談社現代新書1200  
定価：本体720円＋税